

今週のメニュー

■トピックス

◇日中交流サービスセンター株式会社の廃棄物リサイクル事業のご紹介

■随想

◇古代ヤマトの遠景（83）－【歴代天皇と伊勢神宮（1）】－

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

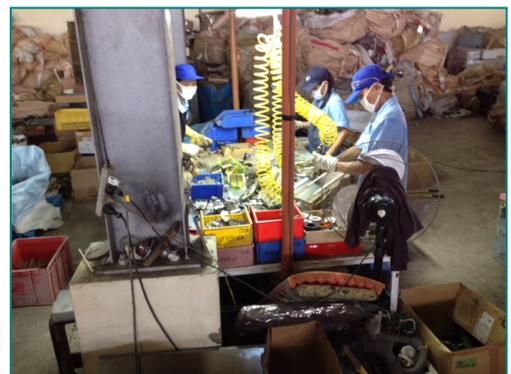
◇日中交流サービスセンター株式会社の廃棄物リサイクル事業のご紹介

日中交流サービスセンター株式会社

私たちは1993年の設立以来一貫して、「環境保護と資源リサイクル」をモットーに日本国内で発生するスクラップを買取り、仕入れた商材は可能な限り原料レベルにまで戻してリサイクルする事業を展開しています。私たちのビジネスは2013年3月に関東経済産業局より「環境配慮型のビジネスモデル20」に選出されています。

日本国内で「廃棄物」として処理費を支払って処分されているものも、元を正せば全て原料・資源です。当社は、究極の MATERIAL・リサイクルにこだわり、今まで廃棄物として捨てられていたものをバージン素材として有価物（価値あるもの）に戻し再生するというリサイクルの仕組みを創出し、その過程ですべてを原料に戻す技術・ノウハウを蓄積してきました。

当社のリサイクルシステムの特徴は、日本国内だけでなく、中国、フィリピンに自社加工工場を所有し、当地で「廃棄物」を高度に分離し再生可能な資源を回収することによりリサイクルを進めていることにあります。特にフィリピンの自社工場は保税特区内にあり、一旦フィリピンにて原料レベルまで加工された MATERIAL は関税がかかることなく（輸出入には当たりません）すべて日本へ戻し、販売を行っています。塩ビが使われている電線を例に上げると、フィリピン工場内で手作業にて“銅”、“塩ビ被覆”、“アルミジョイント”などに分けられ、塩ビはペレット状にされ日本国内へ戻されます。また、原料に戻された MATERIAL は、国内精錬メーカー及び、樹脂成形メーカーへと戻され、リサイクル原料として利用されています。廃棄物をできるだけ原料に戻しリサイクルするこのシステムが「環境配慮型のビジネスモデル20」に選出された理由です。



機器類の解体作業

これまで日本国内から排出される廃棄物は海外へ転売され、当地で再利用されるケースが大半でしたが、当社の場合は海外で加工し、再び日本へ戻すことが可能です。これによりレア MATERIAL などの希少資源の海外流出を防ぎ、資源の国内循環にも寄与しています。

当社はこれまで業務用空調設備、通信伝送機器、配線ケーブル、サーバー、配電盤、機器類、建築設備（断熱材や石膏ボードなどを除く）などを中心にリサイクルを進めて来ましたが、種々の廃プラスチックについても受け入れを拡大して行く計画です。樹脂はPVCを始め、PP、PE、PMMA、PETなどあらゆる種類の樹脂が取り扱い可能です。また、樹脂+金属（基盤類など）も一部取り扱いが可能です。汚れのひどい物、強い貼り合わせの複合材などは受け入れが難しいなど条件もございますが、ご相談に応じますのでお声掛け下さい。



ケーブル解体物の仕分け風景

当社では、基本的にすべての廃棄物を有価で引き取りますが、その処理フローはすべて行き先をトレースすることができ安心して任せただけれます。また、ユニークなシステムとしてリサイクルの「1年お試し計画」もございますので利用していただくことができます。

東京に本社、それ以外でも茨城、東北、九州エリアに事業所を構えており、日本全国の場合にも随時対応可能です。

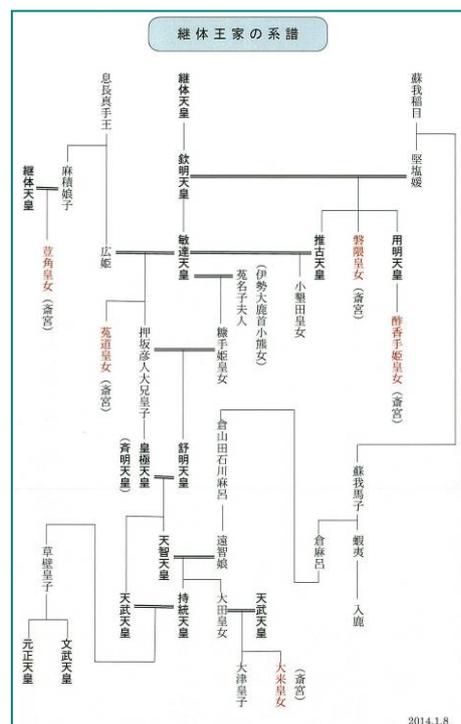
■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（83）－【歴代天皇と伊勢神宮（1）】－

木下 清隆

前回、日本書紀に記されている齋宮の名を列挙したが、崇神天皇から景行天皇までの三人の齋宮は、史実とは関係が無いと見て省くと、雄略朝から天武朝までの間に、六人の齋宮が伊勢神宮へ遣わされたことが判る。この間の天皇は二十人で、約二百年の歳月が経っている。二十人の天皇に対し六人の齋宮は如何にも少なく、天皇家の伊勢神宮に対する態度が意外に冷淡だったことがわかる。しかも六人の内、三人は短期間だったようで、比較的長期に奉仕したのは三人だけだった。このような齋宮派遣をベースとして各天皇の、初代倭王の御魂に対する姿勢、係わり方、御魂の遇し方等を探ってみることにする。

なお、伊勢神宮へ派遣された女性全部を一律に齋宮として扱っているが、齋宮の立場と役割は徐々に変化していったと考えられる。従って、初めから後世のような齋宮として登場したのではないことになるが、ここでは齋宮の名で通すことにする。



継体王家の系譜：クリックで拡大

1) 雄略天皇

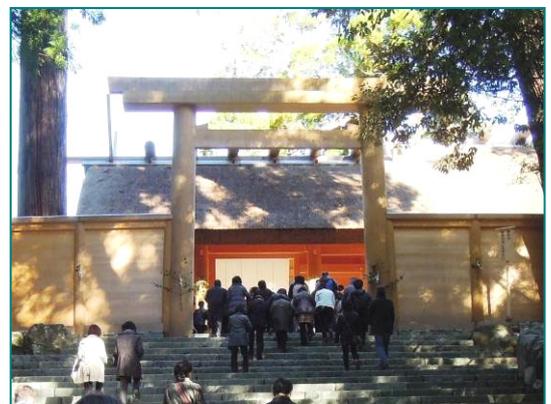
この天皇の時代に御魂は伊勢へ遷座したとの前提で話を進める。雄略紀に^{たくはた}栲幡姫皇女は、伊勢大神に仕えたが、^{いほきべ}廬城部連武彦に^た姦されたと讒言されて自殺した、と伝えている。この場合の栲幡姫は御魂を伊勢へ運んだ女性の可能性もあるが、雄略天皇にしてみれば、自分が遷す御魂のために内親王を遣わすまでも無い、との判断はあったはずである。従って、御魂を運んだのは前に検討したように、巫女だったと考えるのが妥当であろう。この雄略紀が正しいとするなら、栲幡姫は伊勢に宮が出来上がったところで、後世の奉幣に近いことを行なうために遣わされたとみられる。従って、この時の滞在は短期間であったと考えられる。

この栲幡姫は讒言によって自殺したことになっているが、斎宮六人のうち三人までが姦淫に絡んで、斎宮を解かれたり死んだりしている。この記述はなんとも不自然で俄かには信じがたく、恐らく後世になってこのように書き換えられたものとみられる。これらの女性は皆、用明朝以前の女性たちであり、この時代は未だ伊勢神宮の地位も、祭祀の方法も決まっていなかった時代だったといえよう。従って、彼女たちは単に天皇の名代として奉幣に遣わされた程度だったのであろう。伊勢行きの理由がこの程度であれば、短期間の逗留で十分だったということになる。用明朝以降斎宮の制度が整い始め、天武朝でほぼ確立されたと考えられるが、斎宮という後世の役割を用明以前にも適用したことから、混乱が起きたとみられる。斎宮は日神或いは天照大神の傍らにあって、日々仕え奉るのが本来の役目だったとすれば、短期間でこれらの役目を放り出して都へ還るなど、許されない行為だということになる。後世の書紀撰述者は短期間で帰還したと記録されている内親王たちの行動に苦慮し、姦されたといった話を創作した可能性が高い。

雄略以降、清寧・顕宗・仁賢・武烈と続くが、斎宮の記述が何も無いところからみて、彼等には初代倭王の御魂など何の関心も無かったのではなかろうか。彼等にとって初代倭王は、約二百年も昔の人物であり、自分達は応神天皇の後裔だとの意識が強かったはずで、心理的には甚だ遠い存在だったと想定される。

2) 継体天皇

数十年の空白期間をおいて継体天皇の時代になると、伊勢大神への祭祀が本格的に始まる。壹角皇女が伊勢神宮へ遣わされているからである。この女性は息長真手王の女麻績娘子と継体天皇との間に生まれた皇女である。なぜ、継体天皇は伊勢大神の祭祀を始めたのか。それは彼が出雲王家に繋がる人物であったと考える以外に理由は見当たらない。もし、継体天皇が応神王家に繋がるのなら、応神王家の偉大なる雄略天皇が放逐した御魂を、わざわざ祭祀するために自分の内親

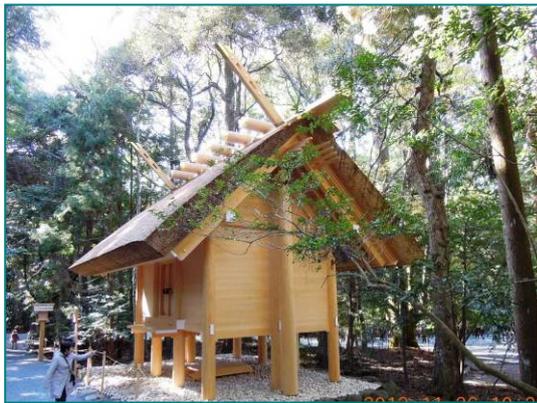


伊勢神宮：新装の内宮

王を、遠隔の地に遣わすことなど考えられないことだからである。継体王家については尾張氏との関係、半島政策等から、この王家の出雲王家との強いつながりを想定したが、伊勢神宮との関わりからも、この結びつきの想定は必要となってくる。このような理由から、継体王家の出自はやはり出雲王家であると結論してもよさそうであるが、そうであれば、

継体天皇の祖は誰なのかが改めて問題となってくる。

先に崇神・景行時代に分封された皇子の可能性が強いことを示唆したが、もすこし突っ込むと崇神紀に、北陸に派遣された大彦命の話があり、これが一つの可能性としては挙げられよう。初代倭王若しくは後継王が東国制圧の一環として、北陸道の越国の制圧に一族のものを向かわせた、或いは平定後にその国の統治のために遣わした、といったことが考えられる。その人物が、後世大彦命と名付けられ記録されたということであろう。この人物に継体天皇が繋がるのではないかとするのがここでの想定である。記紀共に大彦命を孝元天皇の皇子としているが、大彦命を実在の人物とするなら、このような系譜は有り得ないことになる。要するに、初期の倭王家に繋がる皇子ということであり、これは景行紀の皇子分封そのものといえる。



伊勢神宮：新装の御倉

度会氏は、初代倭王の御霊が雄略天皇によって伊勢へ遷座させられて以降、日々滞りなくその祭祀を勤めていたと思われる。彼等は祖霊と直接的な血縁関係があるわけでない。従って、心理的には遠い存在となることから、彼等はいつしか「伊勢大神」と呼ぶようになったと見られる。ただ、いきなり大神が誕生したと考えることには無理があり、何か先例があつてそれをまねた可能性はある。その先例は三輪山の神である。雄略朝の祖霊遷座以降、大和では三輪山の神が最も重要な神

として、祭祀されるようになったと考えられる。この神がいつしか「大神」と呼ばれるようになったとしてもおかしくはない。「大神」といえば「三輪山の神」を表すことになり、「三輪の大神」から「大神」と呼ばれるようになったのではなかろうか。このような三輪山の神の呼称が変化したことを受けて、伊勢の方でも「伊勢大神」と名付けられたと考えられよう。このような経緯から継体天皇も「伊勢大神」と呼び、自分たちの祖神として祭祀を始めたのではなかろうか。

継体天皇が^{ささげ}荳角皇女を遣わしたのは、倭国統一の成ったことを報告させるためだったのかも知れない。荳角皇女が齋宮となって伊勢へ遣わされた時期は、継体朝の晩年になってからではないかと考えられるからである。理由は荳角皇女の誕生が、継体天皇即位の少し前だったと想定されるからである。この皇女の派遣が二十歳前後だったとすれば、継体朝の後期でなければならなくなる。後期であれば倭国統一の報告だったと考えるのが順当となろう。この皇女について姦淫事件は記されていないが、その滞在期間はやはり短かったといえよう。特に長く滞在しなければならない理由は無かったからである。

この^{ささげ}荳角皇女が齋宮となったことから、息長氏が歴史の舞台に登場することになる。この皇女の母親、^{をみのいらつめ}麻績娘子が息長真手王の女だからである。男大迹王と息長氏との結びつきは、先にも述べたように、西国制圧の準備時代と考えられることから、荳角皇女の年齢が想定されたわけである。荳角皇女が伊勢に旅立つに当っては、母方の息長氏は伊勢まで一族郎党を引き連れて随行したはずである。内親王とはいえ、自分の孫娘である。心配で人には任せられなかったに違いない。後世になると内親王の伊勢への旅は「^{さいおうぐんこう}齋王群行」として制度化され数百人の御供が付いた。息長氏の旅は短期間だったかもしれないが、彼らは

現地で度会氏、伊勢国造等と親交を深めたものと想定される。

現在の天皇家は、息長氏と伊勢氏の直系と云えるが、この両氏のことなどがまとめて語られることは余り無いので、次回に触れることにしたい。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

ソチオリンピックが始まりました。開会式当日、関東では何年ぶりかの大雪に見舞われ、おかげで冬季オリンピックの気分も少なからず味わうことができました。日本選手は、15才から41才まで年齢層が幅広く、なんと7回目の出場という方までおられます。ただし、ベテランは何とか前回より上を、できればメダルをと云っていましたが、なかなか難しいようです。とはいえ10年以上もの長い間、少なくとも世界のトップ10を維持しているわけですから感嘆です。冬季のスポーツは、年間通して練習することもたいへんでしょうから、そういった意味でも、その情熱と努力には敬意を表します。(鈴蘭)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp